



ば ば だい す け
馬場 大祐 さん (42)

思いを受け継ぎ、歩み続ける

牛を思いやる 心を受け継いで

全国和牛能力共進会で4大会連続日本一の称号を獲得した宮崎牛。小林市は、その宮崎牛の一大産地であり、その生産技術は非常に高い評価を受ける。豊かな自然に恵まれたこの地で、代々受け継がれてきた技術と生産者の情熱が、最高品質の宮崎牛を育む。現在も生産者たちは、その思いと技術を受け継ぎながら、再び日本一を目指して牛づくりに向き合う。

19歳で畜産の世界に入り、約20年間、牛を育ててきました。学生時代から家業を手伝い牛に触れてきましたが、本格的に畜産を始めてからは、父や研修を通して一から技術を学び続けてきました。就農当初は、牛を病気にさせてしまったり、思うような結果が出なかったりと、悔しい思いを何度もしました。その度に父から怒られ、今思えば、真剣に畜産に向き合えていなかったのだと思います。「お前は良い環境で寝れてよかね。牛は寒いところで寝てるとよ。牛も気持ちよく寝かせてやれ」。

今でも忘れられない父の言葉。この言葉をきっかけに牛を見る目も、畜産に向き合う姿勢も大きく変わりました。父から教わったのは技術だけではなく、牛を思いやる気持ちや牛への情熱。その教えが、今の私を支えています。現在は、肥育だけではなく繁殖にも取り組みながら

肉質を競う県畜産共進会では、サシの入り具合を示す脂肪交雑基準で最高数値を記録。卓越した肉質が評価され、グランドチャンピオンに輝く



思いを受け継ぎ、歩み続ける

マンゴーと歩み 産地を守る

豊かな自然に恵まれた小林市は、県内有数のマンゴー産地。とろけるような果肉と濃厚な甘さが魅力の完熟マンゴーは、市を代表する特産品の一つとして知られている。温暖な気候と降り注ぐ太陽の光を受け、生産者たちはその一玉一玉に愛情を注ぐ。現在、市内では27戸の農家が、よりおいしいマンゴーづくりに励んでいる。



おり た っ ば さ
折田 飛翔 さん (32)

私が、マンゴー農家になって10年になります。現在は、父と妻とともにマンゴー栽培に取り組んでいます。就農当時は、慣れない作業から体力的な厳しさを感ずる毎日でした。それでも、父の仕事ぶりを間近で見ながら、一つ一つ技術を身に付けてきました。正直、若い頃はマンゴー農家にそれほど興味があつたわけではありません。しかし、熱心に栽培に合う父の姿を見て、その思いを受け継いでいきたいと思うようになりました。4月下旬ごろから始まる収穫期は、心身ともに大変で、毎年おいしいマンゴーを作らなければならないプレッシャーもあります。それでも、自分たちが育てたマンゴーを食べた人から「おいしい」と言ってもらえた時は、何よりもうれしく、励みになっています。マンゴーの栽培技術は、年々進化しています。その中には、父が長年の経験の



折田さんがつくる
マンゴーを愛す
おがわ ともこ
小川 智子 さん

人と人をつなぐマンゴー

知り合いから紹介されて以来、20年近く折田さんがつくるマンゴーを食べ続けています。毎年、親戚や友達、お世話になっている人たちにもマンゴーを送り、遠いところでは秋田県まで届けています。普段は、なかなか会えない人たちとも、マンゴーを通じてつながりを感じられることがうれしいです。折田さんのマンゴーは、人と人をつないでくれる特別な存在。これからも多くの人に味わってもらい、長く愛され続けてほしいと思います。

中で生み出した技術も数多くあります。その技術を大切に受け継ぎながら、よりおいしいマンゴーづくりに挑戦しています。一方で、おいしいマンゴーづくりのためには、産地を守っていくことが大切です。農家の高齢化や担い手不足の問題は年々深刻になり「10年後、20年後この産地は続いているのか」と不安になることもあります。だからこそ、私が父から受け継いだ技術や経験を次の世代へつなぎ、小林市のマンゴーの魅力を守り続けていきたいです。

父・長美さんが生み出した栽培技術で育てられるマンゴー。太陽のように鮮やかに色づき、品質にこだわった果実を毎年約47,000個出荷している



この節目を、みんなの思い出に

下記の日程で、例年のイベントの充実に加え、今年限りの特別なイベントも開催します。ぜひ会場へ足を運び、この一年ならではの思い出をつくりましょう！

※令和8年6月23日時点（今後、日程などが変更・追加される場合があります）

3月	2月	12月	11月	10月	8月
・こばやし霧島連山絶景マラソン大会（7日）	・ひいらぎアリーナオープン記念「バスケットボール教室・高校バスケットボール招待試合」	・健幸のまちづくり拠点施設オープン記念「マーチングバンド」（12日）	・小林市未来予想図発表会（6日） ・健幸のまちづくり拠点施設オープン記念×日本のひなた宮崎国スポ・障スポ1年前記念事業「トランポリン演技会」（14日） ・こばやし秋まつり（29日） ・グランドゴルフ大会	・健幸こばやし大運動会〜スポレク2026〜（18日） ・野尻町商工会商業祭	・すき納涼花火大会（8日） ・のじり湖祭（29日）

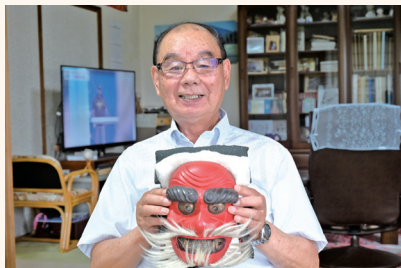


20周年記念事業への意気込みをインタビュー



のじり湖祭 実行委員長
いへむら つかさ
家村 司 さん (42)

新市誕生20周年という節目の年に、実行委員長として携われることをうれしく思います。今年は花火を例年よりも多く打ち上げたり、地元の小学生たちとコラボした新たな企画など、祭りを盛り上げる企画を多数準備しています。当日は、実行委員一丸となって、市内外の人に野尻の魅力を感じてもらいながら、子どもから大人まで楽しめる祭りにしていきます。



小林市郷土芸能保存会連合会 会長
たわら はるお
田原 治男 さん (82)

3年に1度開催される郷土芸能フェスティバルは、市内の郷土芸能保存会が一堂に会し、伝統芸能を披露します。記念事業として開催される今回は、文化芸能にゆかりのある著名人を招くなど、例年以上に盛り上がる企画を考えています。今回のイベントをきっかけに、郷土芸能を知ってもらい、次の世代に受け継いでいくきっかけになればうれしいです。



永久津中学校 3年 生徒会長
にし のむら せいた
西ノ村 晟汰 さん (14)

小林市未来予想図発表会に向けて、修学旅行先で小林市を知っているかなどのアンケートやインタビューを行い、小林市の認知度や印象を調べています。そうした活動を通して、改めてこのまちについて考え、人口減少が進む現状を変えたいという思いが強くなりました。だからこそ当日は、中学生ならではの視点で、未来につながるまちづくりを提案したいです。



- 1_ イベントを盛り上げ、会場を笑顔に包んだ出演芸人の皆さん
- 2_ 宮崎牛などの特産品を求め、多くの人でにぎわったマルシェ
- 3_ お笑いライブのトップバッターとして登場し、会場を一気に盛り上げた蛙亭
- 4_ 記念Tシャツを手にイベントを楽しむ参加者

新市誕生20周年を祝う 記念事業がスタート

新市誕生から20年と大きな節目を迎えた今年、市内各地でさまざまな記念事業が開催されます。

その幕開けとなったのが、市出身のお笑いコンビ・蛙亭のイワクラさんが出演する「蛙亭のハッピーサマールライブ2026」。

今年で5回目となる同イベントは、新市誕生20周年を記念して開催され、当日は、県内外から延べ2千人を超える来場者が訪れました。ライブでは、蛙亭が西諸弁を交えたネタなどを披露し、会場は大きな笑いに包まれました。

また、同会場では小林市の食を楽しむ「ハッピーサマーこばやしマルシェ2026」も開催。小林市産の宮崎牛や焼酎のほか、イワクラさん監修の須木米

のおむすびセットやポップコーンなどが販売され、県内外の人に市の魅力をアピールしました。

さらに、20周年を記念し、蛙亭の2人がデザインに携わった記念Tシャツも販売されました。

イワクラさんは「須木米を県外の人にも食べてもらえてうれしい。これからも小林市を盛り上げられるように」

マルシェに出店した人の声



小林まちづくり株式会社
あかぎ なつみ さん 黒木 陽子 さん
⑤ 赤木 夏海 さん ⑥ 黒木 陽子 さん

マルシェでは、イワクラさん監修のポップコーンを販売し、県内外の人と交流しながら、小林市の魅力を発信することができました。今回のイベントをきっかけに、小林市のファンが増え「また訪れたい」と思ってもらえたら、うれしいです。新市誕生20周年を多くの人と一緒に盛り上げることができたことも、良い思い出になりました。

うなイベントを続けたい」と笑顔。長崎県から訪れた西鍋萌さんは「初めて参加し、小林市のことも知ることができて楽しかった。これからも続けてほしい」と話していました。

たくさんの笑顔とにぎわいに包まれたイベントは、新市誕生20周年を祝う記念事業の幕開けにふさわしい一日となりました。



長年栗づくりに励む
井野 貞実 さん (76)

活気あふれるまちにな
ってほしい

須木地区で20年以上、栗づく
りを続けています。私自身も年
を重ね、傾斜地での作業は大変
になってきました。それでも収
穫の時期になると、市外からも
多くの人たちが手伝いに来てく
れています。そうした人たちがと
のつながりは、長年続けてきた
からこそ築くことができた大切
な財産です。

これからも体が動く限り、栗
園に足を運び、一つ一つの栗を
大切に育てながら、たくさんの人
と交流を続けたい。

そして、いつの日か小林市が
今よりも若い世代でにぎわい、
子どもの笑い声が響き、新しい
命の誕生や新しい暮らしが始ま
る、そんな明るい話題があふれ
るまちになってほしいですね。

世代を超えてつながる
まちに

私の夢は、地元の中学校の先
生になること。その夢に向かっ
て、今は探究活動やボランティア
活動で地域について学びなが
ら、勉学にも励んでいます。地
域の産業や人とのつながりに触
れることで、小林市の魅力を改
めて実感しています。

また、小林市は学生が利用し
やすく学習しやすい施設や、幅
広い世代が交流できる場が充実
していて、とても暮らしやすい
まちだと思います。そんな小林
市だからこそ、これからも子ど
もから高齢者まで幅広い世代が
交流し、誰もが元気に暮らせる
まちであってほしいです。

私もボランティア活動が続け
て、多くの人と交流し、地域に
貢献していきたいと思っています。



小林高校2年
深見 美奈 さん (16)



初めての育児に奮闘中
中窪 来夢 さん (23)

娘が「暮らしたい」と
思えるまちに

今年2月に娘が生まれ、子育
てに取り組んでいます。私は生
まれ育った小林市が大好き。自
然に囲まれ、子育て支援も充実
しているこのまちは、子育てし

の思い

未来を描きますか。

未来をつくるのは
一人一人
あなたはどんな

このまちの医療を支え
ていきたい

現在は病院での実習で、より
実践的な看護を勉強中です。
現場でしか学べない緊張感や
責任の重さを日々感じしていま
す。実習中、患者さんから「こ



小林看護医療専門学校3年
安藤 星哉 さん (21)

やすい環境だと感じています。

特に生まれてから1カ月は慣
れない育児で大変でしたが、2
カ月訪問で育児について相談で
きたり、子どもを一時的に預け
られる環境が整っていたりと、
子育てをする上で心強い支えに
なっています。

これからも、このまちで子育
てを続けていきます。だからこ
そ、子どもたちが安心して成長
できる環境がこれからも続いて
ほしい。そしていつの日か、娘
も「このまちで暮らしたい」と
思ってくれたらうれしいです。

れからの小林市をよろしくね」
と声を掛けられたことがあります。
その言葉を聞いて「これか
らは私たちが支える番」と実感
し、小林市で働きたいという思
いがより強くなりました。
卒業後は、市内の病院で働く
ことが決まっています。私は人
と話すことが好きなので、患者
さん一人一人との会話を大切に
しながら、不安な気持ちに寄り
添える看護師になりたいです。
小林市の医療を支えていける
看護師になれるよう、一歩ずつ
成長していきたいです。



ファミリーショップたじり 店長
山川 伸 さん (40)

子どもたちが帰ってき
たくなるまちにしたい

「地元のために何かをしたい」
と思い、約15年前に実家の店を
継ぎ、営んでいます。須木の台
所として、日用品から食材まで
幅広くそろえ、地域の皆さんの
暮らしを支えています。

この店は買い物をするだけで
なく、気軽に交流できる場所。
そんなお店を続けることが、地
域を支えることにつながると感
じています。

地域が変わっていく姿を見て
きたからこそ、生まれ育ったこ
の地域を守り、次の世代へつな
いでいきたい。これからも、お
店や地域活動に積極的に関わり
ながら、子どもたちが「地元の
ために何かをしたい」「いつか
帰ってきたい」と思えるまちを
つくっていききたいです。

生まれ育ったまちを
守り続けたい

生まれ育ったこのまちを守り
たいという思いを胸に、市民の
生命と財産を守るため、約15年
間消防団活動が続いています。

最近では、高齢化の影響で捜
索活動に出動する機会が増えて
きたように感じます。危険な現
場を経験したこともあります
が、このまちを守りたい思いは
今も変わりません。消防団の出
動がないことが何よりですが、
いざという時には、市民の皆さ
んから安心して頼ってもらえる
存在でありたい。

これからも日頃の訓練を重
ね、地域の安全を支えていきま
す。安心・安全に暮らせるまち
を次の世代へ引き継いでいくこ
とが、私たち消防団の役目だと
思っています。



消防団第10分団第5部 部長
相牟田 泰章 さん (45)

「小林市の人や自然、ふらっと散歩ができるこの環境が好き——」。

今年20歳を迎えた里岡姫奈さんが、何気なく発した一言。その言葉には、生まれ育ったこのまちへの深い愛着が滲む。

新しい小林市とともに歩み始めた彼女の20年は、決して平坦な道ではなかったはず。それでも、両親や多くの人に支えられ、前を向き自分の人生を一步、また一步と歩んできた。幼い頃、両親に抱きかかえられていた女の子は、今、力強く自分の足で自分の道を歩む。

「自分が決めた道は、悔いなくやり切ってほしい」。

幼いころから父・広章さんにかけられてきたその言葉は、今も姫奈さんの心の支えとなり、背中を押し続ける。そして、その教えを「自分に子どもができて

からも伝えていきたい」と真っすぐに語る。親から子へ受け継がれた思いは、また次の世代へと着実に受け継がれていく。

今回、取材で出会った人たちも皆、それぞれの場所で、それぞれの思いを胸に歩み続けていた。

地域を守りたい。子どもたちの成長を支えたい。地域の魅力を多くの人に知ってもらいたい。

その思いは、誰かに強いられただけではなく、このまちで暮らし、このまちで笑い、このまちで悩み、このまちを愛してきたからこそ育まれたものだ。

一人一人の思いは異なっても、その一つ一つが積み重なり、このまちの20年を築いてきた。そして、それは誰かの支えとなり、また親から子へ、先輩から後輩へ言葉で伝えられ、ときに

は背中を示されながら、受け継がれてきたものだ。目には見えなくても、その思いは、このまちに確かに息づいている。

これから先、人口減少がさらに進み、地域を取り巻く環境は大きく変わっていくかもしれない。それでも、先人たちから受け継がれてきた思いまでは、決して失ってはならない。

新市誕生20周年は、これまでの歩みを振り返ると同時に、次の20年へ踏み出す新たな出発点。

まちづくりに終わりはない。受け継いだ思いを、このまちで行動に変え、また次の世代へつなげていく。その一步一歩が、このまちの未来にきつとつながる。未来は誰かではなく、このまちを愛する私たち一人一人がつくるものだから。

—— 新市誕生 20 周年特集 ——

受け継がれてきた思いを
未来につなぐ